Chapter 4 : **ダークネス・ロード覚醒 パート3**

翌日、ランタンの光が優しく灯るテールナーの小屋で、若いカップル――シャワーズとブースターが、占い師の彼女とその相棒ゲッコウガの前に、緊張した面持ちで座っていた。二人は、近づく学園プロムのデートを忘れられないものにするにはどうすればよいか、相談に来たのだった。

テールナーが温かく答えようとしたその時、濡れた足音と共にゲッコウガが部屋に入り、冷たい空気が漂った。

｜「それどころじゃねぇことが起きてる」  
ゲッコウガはテールナーに頷いた。

空気が変わった。キツネの体毛がわずかに逆立ち、彼女はその意味を察した。

｜「……彼のこと、でしょ？」  
テールナーが尋ねる。

驚きつつも、シャワーズは雰囲気を和らげようとした。

｜「なんだか、あたしたちの逆バージョンみたいね。炎の彼女と水の彼氏！」

テールナーはくすっと笑い、尾を揺らしたが、ゲッコウガは黙ったまま、窓の外に広がる嵐の空を見つめていた。

突然、軋む音を立ててドアが開いた。そこに立っていたのは、きらびやかなピンクのマントを羽織った訪問者――今や人気セレブ歌手となったプクリンだった。外で話を聞いていたらしい。

｜「今、ダークライって言った？」

部屋が静まり返った。

｜「全部聞かせて」

—

テールナーは静かに、魔力を宿す水晶玉を取り出した。雨に濾された光の中で、ぼんやりと青く輝く。それに手をかざすと、過去の幻が靄の中に浮かび上がる。

かつてダークライは、薄暗い路地裏で占いをしていた。傾いたモノクルをかけ、けばけばしい服を着て。彼はアブソルを騙し、レックウザの初代ガチャ機という詐欺投資話に乗せた。

その後、心が折れ傷ついたバンギラスが、恋の相談に訪れた。

｜「あのハンマーの子にナンパしてみろよ」  
ダークライは狡猾に囁いた。

結果は最悪だった。カヌチャンにぶん殴られ、バンギラスは激怒。ダークライの屋台をぶち壊し、罵声の嵐を浴びせ、彼を鎖で縛り、エーフィが閉じ込められた檻の隣に繋いだ――償いとして。

—

幻影は消えた。

｜「マジかよ……母さん、昔は大変だったんだな…」  
ブースターが呟いた。

プクリンは明らかに動揺し、手をぎゅっと握り締めた。

｜「……そこまでしてたなんて……」

彼女はきっぱりと向き直る。  
｜「あたし、アイツを探しに行く」

ゲッコウガが前に出て、腕を組む。

｜「死ぬぞ」

｜「バンギラスに報告すれば？」  
シャワーズが提案した。

テールナーは首を振った。

｜「彼はもう占い師の言葉を信じないの」

危機を悟ったイーブイカップルは、両親に知らせるため急ぎその場を離れた。

一方プクリンは、誰が自分を信じてくれるか分かっていた――サーナイトとルカリオだ。

噂はすぐに広まった。そして、指名手配書が発行された。

**指名手配：高危険度**  
ダークライ

**セグレイブ & グレンアルマ**  
生死問わず

町外れの空に、懸賞金の炎が灯る。

長年この双子の盗賊を追っていたバシャーモは、ポスターを読みながら拳を鳴らした。

｜「やれやれ……面白くなりそうだな」